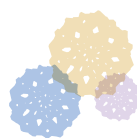


棚田に吹く風

1 2013
月号
Vol.86
隔月刊



- 2 特集
棚田と地域おこし協力隊
- 5 フォトエッセイ
棚田の四季
- 6 棚田・里山からのたより
ボランティアと共に堰の保全に取り組む
福島県喜多方市山都町本木・早稲谷地区
- 8 棚田番長
「田んぼに入る絵描き」の
棚田見聞録
- 9 棚田博士は今日も行く
橋原街道沿いにある棚田
高知県津野町貝の川
- 12 会員のひろば
- 14 棚田ネットワーク
エコプロダクツ2012 出展レポート
- 15 Project Report



みなさん、全国の「地方」といわれる地域に都会から入って、地域おこしに奮闘する若者がいることを知っていますか。フジテレビのドラマ「運命のヒマワリ」の主人公としても取りあげられ、今、注目されている「地域おこし協力隊」。もちろん棚田地域にもその活躍は広がっています。

今地域において何が必要か。都会人としてできること。そして、なぜ今地方なのか？ そんな彼らに熱い思いを語っていただきます！

棚田と 地域おこし協力隊



地域おこし協力隊ってなに？

地域おこし協力隊は、人口減少や高齢化等が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、定住・定着を図ることで、地方での貢献や生活に魅力を感じる都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくとする取り組みです。地方自治体が都市住民を受け入れ、協力隊員として委嘱し、1年～3年の期間で、農林漁業の応援、水源保全・監視活動、住民の生活支援などの地域協力活動に従事してもらいながら地域への定住・定着を図っていきます。2009年3月から総務省により制度化され、隊員を受け入れる地方自治体に対して、1人あたり上限350万円が特別交付税として交付されます。2011年には隊員数413名まで増え、147の自治体（3府県・144市町村）で活躍しています。

募集地域は随時「地域おこし協力隊」のホームページ（<http://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/>）でご覧になれます。



■石部棚田へ行こうよ!～静岡県松崎町石部棚田保全サイト <http://ishibu-tanada.com/>

伝統的な米作りに感動



静岡県松崎町石部
豊嶋 学 (24歳)



富士常葉大学の学生ボランティアとして4年間石部棚田の保全活動をしてきました。元々、米どころ新潟の兼業農家出身なので、ある程度の農業経験はありました。しかし、石部棚田の農作業は今まで経験した事のない作業の連続でした。鍬を使った伝統的な米作りを今なお行っている石部棚田の保全活動にとっても感動しました。

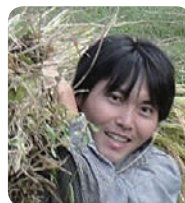
いつしか個人的にも石部へ訪れるようになり、棚田保全に協力したい、松崎町に住みたい、けど仕事がない、という状況になっていました。そんな時、地域おこし協力隊の募集があることを聞き、すぐに応募しました。採用していただけてからは、棚田保全活動や棚田を活用したコンサートなどイベントの検討・実行などを行っています。任期終了が迫っているこれからは、自立に向けて、地域のコミュニティ施設の設置・管理などを考えていきたいです。

棚田の保全は、町内外で出会った様々な人達の直接的または間接的な協力があつて成り立っています。これからもたくさんの方々の力をお借りして棚田を守っていききたいと思っています。

現場から提言をし続ける



新潟県十日町市池谷
多田 朋孔 (34歳)



私が活動しているような中山間地では農業を行うにも条件が悪く、若い人も少なく、いたとしても農業ではなく土建業または介護施設で働いている方がほとんどです。こうした中、棚田を耕作し続ける方々の年齢は徐々に高齢化しています。

棚田を耕作し続けられるようにするためには、中山間地で農業をベースとした取り組みをしながら生活が成り立つような、収入と支出のバランスが取れる仕組みを作っていく事が不可欠だと思います。

そのような仕組みを作っていくために、一定期間人件費がかからない人材を外部から募集出来る地域おこし協力隊のような制度は、上手く使う事が出来れば非常に有効な制度であると思います。

ただ、受け入れる地元側にしつかりとした考えがないと、協力隊員と地元でミスマッチが起こるケースもあります。その場合、折角来た協力隊員が途中でやめてしまう事もあり、制度を上手く活用出来ないという結果になります。

地域おこし協力隊の制度は現在3年目であり、まだまだ完成されたものではありませんが、その分、受け入れ地域や隊員が自由に裁量出来る部分も多いですし、総務省に現場からの提案を出す事も出来ます。私としては隊員の任期が終了した後も今住んでいる池谷集

落に住み続けてこれまでの取り組みを継続していく事を考えています。そして現場から国の政策に対して色々と提言していく事を通じて全国各地の棚田で担い手が増えていくようにできればと考えています。

■池谷・入山ガイド「小さなムラをみんなで一緒に守って行こう!」 <http://www.iketani.org/>

英田上山棚田団

岡山県美作市上山
西口 和雄 (46歳)



上：村人とのショット
下：俳優の伊勢谷友介さんにきていただいてイベントなどもおこなっています
右：セグウェイで田圃の水管理をしています



私は、臨時職員としてではなく、コンサル的にフリーに動くスタイルながら、地域でがっつりと現場をこなす人財として村人と協力しながら活動しています。私がいる上山集衆では、100町歩8300枚の棚田の再生をベースに1000町歩の里山再生、雲海温泉施設・キャンプ場の活性化を行い、2013年4月を目処に一般社団法人上山集衆協議会として村が営利組織となる新たな一歩を踏み出します。それと並行して隣接する市町村とも連携を図り、地域おこし協力隊の導入志縁、適正人財の投入等様々な連携を図っています。

昨年度、全国の地域おこし協力隊をメインとした村衆LLPという組織を立ちあげ、Egobooksを利用して日々各地域の連携強化を進めているところです。勿論ここでは総務省とも連携を図り産官学連携をも視野に入れた動き方をしています。昨年、吉備人出版社から『愛だ！上山棚田団〜限界集落なんて言わせない！』を出版していただきブックインとつとり地方出版文化功労賞奨励賞を受賞しました。

来年度、私は任期三年を終了し、フューチャーセンター創設を新たな地域活性の起爆剤となる企みを企て中でして、これができれば民間主導中山間地発！複合型インキュベーションセンターが誕生することになります。

地域に入る！これこそがこれからの新しいライフスタイルだと確信し、更なる縁脈創出に向けた取り組みに発展させていく所存です。

■ RSK 放送メッセージという番組で特集を組んでいただきました！ 活動内容がよくわかります。是非見てみてください！⇒ <http://youtu.be/h6hnmKRVik>
■ 上山集衆 <http://ueyama.shu-raku.jp/> ■ 村衆 LLP <http://sonraku-llp.net/> ■ 西口和雄 <http://about.me/kattixoops>、<https://www.facebook.com/kattixoops>

地域の負担にならない 仕組みづくりを

高知県津野町貝ノ川地区
西森 路晃 (30歳)



貝ノ川地区の棚田では過疎高齢化が進み棚田の維持が年々困難になってきています。棚田を守る為、地域の活性化を目指し今年度よりオーナー制度を導入する事となりました。私はホームページや資料作り、連絡役等、地区の方が出来ない事務的な事をサポートし、それと同時に今まで田んぼで米作りをした事が無かったのでオーナーさん達と一緒に地域の方々いろいろな教わりながら米作りを体験しました。水田作りから収穫までの間、数回にわたる作業日には地区の方々とオーナーさんが一緒に作業し、交流を通じて地域が元気になったと思います。

今後さらに過疎高齢化が進む中、保全活動を続けていく為に地域の方々の負担にならない仕組みを作り、オーナーさんと共に守っていかれたらと思います。現在、棚田に再々来てもらう為、フォトコンテストの写真募集も始めました。貝ノ川の200枚以上からなる石垣の棚田、この美しい日本の原風景と文化が後世に伝わっていく事を願います。

■ 津野町地域おこし協力隊 <http://tsuno.main.jp/>

上：初めての米づくり
下：フォトコンテストの企画も

棚田の四季

写真・文 梅野 秀和



上：福岡県八女市星野村広内棚田 下：大分県玖珠郡玖珠町

雪景色

雪、雪、雪、また雪。

標高差230メートルの斜面に425枚の棚田がある、九州を代表する星野村広内棚田。黒い石垣の畦と田んぼの表面に積もった白い雪が重なり合い、ついに「天に至る」光景を見ると、あらためて先人たちの今日に至るまで



Profile

~~~~~

梅野 秀和

うめの ひてかず



1947年、佐賀県生まれ。写真は独学、主に写真雑誌やコンテストで学ぶ。1990年頃から風景写真を本格的に撮り始める。1994年、月刊誌『日本カメラ』で年度賞受賞。1998、2004、2007、2008、2009、2011年視点入選。2005、2006年JPS展入選。2002、2003、2011年二科展入選。

●写真集 「九州花百景」「九州花百景Ⅱ」「棚田～田んぼの四季～」(ほおずき書籍)、「九州の一本桜」(梓書院)、「だんだん田んぼの詩」(権歌書房)ほか。

の苦労と努力に頭が下がります。

白い雪が大地を覆い、田んぼは稲を刈った後の切り株模様が整然と並び、一帯はモノトーンの世界が広がります。草も木も、生きとし生くるものすべてが春を待っています。





上：一番広い大谷地の棚田／左下：春の大谷地棚田／右下：ボランティアに送る「上堰米」

## ボランティアと共に堰の保全に取り組む

### 福島県喜多方市山都町本木・早稲谷地区

穀倉地帯である会津盆地と標高2000メートル級の高山が連なる飯豊連峰の間、標高3000メートル〜7000メートルの山々に囲まれた福島県喜多方市山都町北部には、無数の小さな棚田が広がっています。それらの多くは天水ではなく周辺の河川を水源としています。田んぼと川を結び付けているのが、地元では「堰」と呼ばれている山腹水路です。

山都町本木・早稲谷地区は、合わせて80戸ほどが立ち並ぶ小さな集落です。そこでは代々田畑を耕し、家畜を飼い、山菜やキノコの採取、炭焼きなど山の恵みを利用しながら暮らしてきました。この地区の棚田に水を届けているのが「本木上堰」です。地元に残る石碑から、江戸時代中期の延享4年（1747年）に約12年の歳月を掛けて完成したことが判っています。以来農民のたゆまぬ努力によって受け継がれてきました。

本木上堰は飯豊連峰から流れて

くる早稲谷川上流部から取水し、山中をまるで地図の等高線を描くように途中の小さな棚田を潤しながら、もともとも田んぼがまとまっている本木地区大谷地まで続いています。取水口の標高が350メートル、終点が290メートルで、全長は約6キロ。その標高差はわずか60メートル。多くは素掘りの土側溝で建設当時の姿をよく残しています。見通しの全く利かない深い山中で、これだけの精度の傾斜を精密な計測器や重機も使わずに造った当時の土木技術の高さに驚かされます。同時に余りの山深さに、これまで人力だけによる維持管理を265年にわたって続けてきた農民のひたむきさと苦勞を感じることが出来ます。

しかしこの伝統ある堰も、いま存亡の危機を迎えています。その原因は耕作者の高齢化と後継者不足です。昭和43年にはこの堰に関わる耕作農家は50軒、受益面積は1365坪ありました。しかしそ



の後は急激に減少し、今は農家が13軒、受益面積は674㌥に半減しています。今後これ以上耕作者が減少すれば、堰の管理ができなくなる可能性があります。堰が放棄されてしまえば棚田への水の供給は途絶え、耕作できなくなるだけではなく、棚田と里山が織りなす美しい田園風景も、堰を守り続けた伝統も消えてしまうのです。

そうやってしまう前にと、2000年からある試みが行われています。それは、毎年5月の連休に行われる「堰浚い」というもともと過酷な共同作業を、都会の人に手伝ってもらおうという取り組みです。

この辺りは2㍎近い積雪に見舞われるために、冬には堰に水を流しません。そのためにこの間溜まった土砂や落ち葉、倒木等を、春に全てきれいに浚います。全行程（途中には隧道等もあるので実際は5㍎程）の側溝を、ひたすらフォークやスコップを使い手作業で浚っていく仕事は決して楽なものではありません。ましてかつては50軒の農家が共同でやっていたことを、

残ったわずかな農家でやらなければいけないのですから。その作業に都会の助っ人を頼もうというのです。

当初、集落の共同作業に地域外の人が加わることは様々な不安がありました。そもそもゴールデンウィークにこんな山奥までわざわざ人が来てくれるのか、疑問を持つ人もいました。ところがいざ手を開けてみると、毎年多くの方が手伝いに訪れ、リピーターも少なくありません。ただひたすら土砂や落ち葉と格闘する作業にも関わらず、彼らは何に魅了されたのでしょうか。それは目前に広がる美しい田園風景や豊かな自然、水、空気、そ

## ■ 棚田へのアクセス

【公共交通】 JR磐越西線山都駅から6.5km、タクシーにて約10分

【自動車】 磐越道会津若松インターを降り、国道121号線を北上、国道459号との交差点を左折し山都町方面へ。山都町相川地区のT字路をノノ木方面へ。本木活性化施設が目印。インターから30km、車で約50分

## ■ お問い合わせ

本木・早稲谷 堰と里山を守る会  
事務局 浅見彰宏 TEL: 0241-38-2985

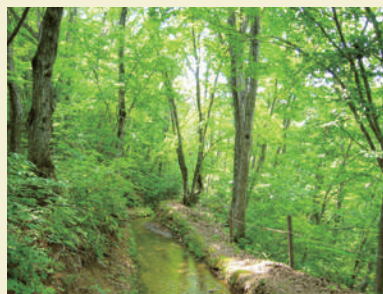
●メール [higurasifarm@yahoo.co.jp](mailto:higurasifarm@yahoo.co.jp)

●ブログ <http://white.ap.teacup.com/higuras/>



してそれらを守り続けてきた農家の暮らしを、交流を通して垣間見体感できるからかもしれません。13回目を迎えた2012年には49名の方がボランティアに来てくれました。特筆すべきは、震災後もボランティアの数が増え続けていることです。2009年からは上堰米と銘打ち米の直売を開始し、食べることで堰を支えてもらっていて、販売量も順調に増えています。まさに、山間地の農業と一緒に関わり続けたいという強い結びつきが風評被害を乗り越えたと言えるのではないのでしょうか。

本木・早稲谷 堰と里山を守る会  
事務局 浅見彰宏



左：上堰の全容（赤い線が水路）／中：新緑の本木上堰／右：ボランティアによる堰さらい



## 棚田の番人 第四回

# 棚田番長

愛知県新城市  
鞍掛山麓千枚田保存会 会長  
小山舜二（72歳）

「二枚目のな優男<sup>なまゆらい</sup>ではないが、男前だ。棚田に立っていると、相当に魅力的な風貌である。

有能である。一人で書き続けている『四谷の千枚田だより』（月刊）は112号になった。イベントを仕掛け、講演や観察会のレクチャーをし、千枚田の写真を撮る。自分の米には絶対の自信を持つ。

ところが、かなりクセがある。「都会人の手伝い<sup>てづかい</sup>など大迷惑」と公言し、他者をガングン批判する。聞いていて腹が立つほど。真意は別のところにあるのだが、それでも、笑顔の三河弁で「こんだいつ来るんだん？」などと言われると、ついつい許してしまうのだ。



## 「田んぼに入る絵描き」の 棚田見聞録

絵・文 酒井英次

愛媛の西予市城川町窪野の岩上田です。

伊予（愛媛）から土佐（高知）に抜ける街道沿い、人々が仰ぎ見る巨岩上の窪みに一坪あまりの田があります。これが岩上田です。

2011年10月、棚田サミットが徳島の上勝町で行われました。四国の西側（愛媛など）は未だ取材したことがありませんでした。この機会に廻りたく考え、西予在住の棚田学会の友人・井上さんと連絡を取りました。幸い、井上さんと、知人の河野さん（松山在住の写真家）が案内してくれるとのこと。愛媛の田を多く見せてもらいましたが、岩上田がより強烈な印象を受けました。三人で岩に上って、切り株を数えました。何回か各々数えましたが、その都度、数が異なり、合いません。百株前後と思われました。ふと、百八ではないかと気付きました。百八の苗を植えながら神仏に豊作を祈ったのではないかと思います。

絵は、巨岩が大海（春、秋の田んぼ）を行く如く描きました。



岩上田  
(91×61cm, 2012年9月作)



# 棚田博士 は 今日も行く!

中島峰広の  
全国棚田行脚

## ゆすはら 檮原街道沿いにある棚田

高知県津野町貝の川



高知県津野町は、2005年2

月に葉山村と東津野村が合併して  
できた県西部の町。貝の川は旧葉  
山村中央、龍馬脱藩の道といわれ  
る檮原街道から北へ1<sup>き</sup>ほど入っ  
た山間の集落である。棚田学会理  
事今井英輔さんを通じて貝の川が  
棚田オーナー制を始めたことを知  
り、早速訪ねることにした。

2012年9月、高知から特急  
あしずり3号に乗り、須崎で下車  
すると、訪問を知らせておいた貝の  
川棚田保存会代表大崎健夫さんが  
役場職員岡崎光明さんを伴い待っ  
ていた。大崎さんは津野町の町会  
議員でもある。現地までは、公共  
の交通機関であれば、須崎駅から  
1日10便運行している檮原か杉の  
川行きの高知高陵交通バスを利用  
津野町役場前で下車すればよい。

### 石積みみの棚田 その量感に圧倒される

岡崎さんが運転する車で貝の川  
へ向かう。須崎の市街地から国道  
197号、かつて津野山街道といわ  
れていた檮原街道に入り、須崎で  
土佐湾に流入する新莊川に沿って  
遡る。幅200〜300<sup>メートル</sup>の谷底  
平野のなかを20分ほど走ると、役  
場の庁舎がある永野の集落が見え  
てくる。その集落の手前、道の右  
側に「ようこそ棚田の里貝の川へ」  
の看板がたつ三叉路を右折、すぐ  
に新莊川の支流貝の川に沿って棚  
田が現れ、貝の川集落に到着する。  
棚田は、貝の川の左右兩岸と谷頭  
部分にあり、右岸と谷頭部分は傾  
斜4分の1の急斜面に、左岸は谷  
底の傾斜20分の1の緩斜面に分布  
している。右岸の急斜面と谷頭部

分にある棚田は、対岸にある大崎  
家の庭から眺めると、まるで石積  
みの壁のように見える。右岸の石  
積みは5列、各列15段〜20段ず  
つになって並び、谷頭部分にも20段  
ほどあり、その量感に圧倒される。  
各段の石積みの高さは1〜2・5  
<sup>メートル</sup>、1・5<sup>メートル</sup>ほどのものが最も多い  
ようだ。

集落最高所の展望所から見ると、  
各棚田の形状と大きさがよくわか  
る。形状は、全体としては等高線  
状に波打ち、凹の部分と凸の部分  
に分かれ、それぞれの棚田は幅数  
<sup>メートル</sup>、長さ数十<sup>メートル</sup>の細長い形をして  
いる。一枚は1〜2<sup>枚</sup>のものが多

なかしま みつひろ  
中島 峰広 (棚田博士)

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO  
法人棚田ネットワーク代表。全国棚田  
(千枚田)連絡協議会理事、棚田サミッ  
ト開催地選定委員会委員長。1933年  
宮崎県生まれ。早稲田大学教育学部地  
歴科卒。2004年まで早稲田大学教育  
学部教授。著書に『日本の棚田—保全へ  
の取り組み』『百選の棚田を歩く』『続・百  
選の棚田を歩く』『棚田 その守り人』(以  
上、古今書院)。現在、百選外の棚田に  
ついての執筆準備のため全国行脚中。



いが、そのなかの数枚は畝町直しにより4×5㍎の広さがあり、形状も方形に近い。畝町直しは7、8年前、旧葉山村の単独事業によるもので、事業費75㍈を村が負担、25㍈の自己負担で行われたという。

## 多くの人が集うイベントに成長したキャンドルまつり

棚田保存会代表大崎さんは69歳、71歳の奥さんと2人だけの世帯。2人の子供は高松市と高知市に住んでいるそう。須崎工業高校を卒業後、高知市の造船所に勤務、父親から農業を学ぶために52歳で退職、故郷にUターン、専業農家になった。その父親は6年前に83歳で亡くなったのでタイミングとしてはよかったと思っていると仰しゃる。

所有する水田70㍎、26枚、ほかに離農した農家の15㍎分を引き受けている。このうち、18㍎、15枚はウシとヤギの放牧地として利用、残りは水稲と牧草の輪作を行っている。したがって、毎年作付けする水稲は25㍎ほどで、残りは舍飼用の飼料としてエンバク、イタリアンを栽培しているという。機械類はすべて父親が購入したもの、



1：棚田全景／2：楽しい棚田キャンドルまつり案内板／3：大崎さんは棚田を山羊の放牧地としても利用。年3～4回の草刈り作業もしなくてはすむという



中型乗用トラクター、乗用4条田植機、家畜の餌にするワラが欲しいためコンバインではなくバインダー、脱穀機を所有している。

ウシは繁殖牛2頭を飼育、畜舎にはそれぞれの名前と出生日、出産の記録を書いたボードが貼り付けてあった。「めぐみ」は出生地宮崎県、出生日2007年5月13日、初産2009年5月30日、2産2010年6月6日、3産2011年9月6日、人工授精2012年3月30日、出産予定2013年1月10日。「あみ」は出生地熊本県天草、出生日2009年7月24日、初産2011年10月6日、人工授精2012年1月19日、出産予定2012年10月29日であった。2歳で子供を生

むウシの成長の早さにあらためて感心する。生まれた子供は、オスの方がメスよりも成長が早いいため5万円ほど高く売れるそう。昨年は2頭の出産で76万円の収入があり、「これが私のボーナスだ」と仰しゃる。大崎さんは、日本舞踊坂東流のお師匠さんである奥さんが週3回高知市や須崎市へ出稽古に出かけるので、ほとんど一人で農作業をしている。議員の出張で家を空けるときにウシの世話をしてもらうくらいだそう。議員は、帰郷して2年目の1996年に葉山村の村議になって2期、町村合併で一旦離職、2009年津野町の町議としてカムバック、現在3期目を務めている。また、集落で

は第3期中山間地域等直接支払の代表、集落の2大イベントである貝の川棚田キャンドルまつりと棚田オーナー制を仕切る世話人会の代表でもあり、地域活性化のキーパーソンの存在である。世話人は大崎さんを含む七人の侍、大崎家の前に全員集合して下さった。

七人の侍が最初に取り組んだイベントは貝の川棚田キャンドルまつり。集落を活性化させるために、隣の仁淀川町長者で2007年に棚田を舞台にした「火祭り」キャンドルナイトを始めたことを知り、視察に出かけて学習。2009年に実行委員会を立ち上げ、貝の川でもキャンドルまつりを始めた。容量2リットルのペットボトルを飼葉用の押切りで半分に切断、キャップの部分の底にして水を張り安定させてローソクを立てたキャンドル3000本を4週間隔で畦にセットした。初年度はボトルをコンビニの屑物入れから集めるのに苦労したが、2回目以降町内の天然水工場から出る不良品を手に入れ補充するようになって楽になった。押切りの作業は、七人の侍が中心になり、集落総出で行い、半日で



## 世話人会 七人の侍

最長老は在木正男さん83歳、水田50㍓を若い者に負けずに耕作する長老。大崎正春さん80歳、水田20㍓を70歳まで土木作業で鍛えた身体で



耕作。大崎茂さん79歳、水田20㍓を耕作するほかハウスでニラを栽培する専業農家。大崎勝司さん74歳、自家菜園の畑を所有、65歳まで長距離トラックの運転手。大崎光男さん73歳、水田20㍓を耕作、60歳まで須崎のパン工場職人。大崎徹男さん63歳、土木作業に従事しながら水田15㍓を耕作する兼業農家である。

このほかに、区長の大崎正さん47歳、須崎のサッシ工場に勤め、水田30㍓を耕作する兼業農家も顔を出していたが、正さんは七人の侍の予備軍とのこと。それにしても、最長老の在木さんを除き、すべて大崎姓。よく使われる屋号ではなくお互い正男さんとか正春さんと名で呼び合っているそうだ。七人の侍は、平均年齢74歳、そのうち6名は兼業を引退、時間に余裕を持ち、楽しんで農業に専念する元気な高齢者集団である。代表の大崎さんは、集落で何かをしようとする場合、最も頼りになるのがこの人たち、65歳を高齢者と呼ぶべきではないと仰しやる。

終えるそうだった。2011年には約280名の小学生も参加して国道沿いにまでキャンドルを広げ、その数が4000本に増え、2000人の客が訪れるイベントに成長したという。イベントは、出店する町外と地元13店が売り上げの10割を拠出する協力金、役場職員のカンパ5万円、町内の企業や商店、貝の川出身者の寄付などで運営費が賄われており、各方面からの協力をえながらも自立した集落のまつりになっている。

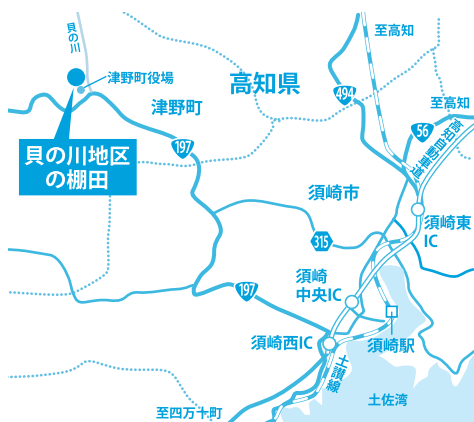
## 貝の川の七人の侍は 棚田の守り人

2012年には、キャンドルまつりで自信をえた七人の侍が棚田保存会を立ち上げ、高齢者の放棄田30㍓を利用して棚田オーナー制をスタートさせた。貝の川のオーナー制は、私が分類した類型によれば作業参加・交流型に当たり、都市住民が面積1㍓当たり2万5千円の会費を払って棚田を借り、地元農家の指導を受けて4月田起こし・畦塗り、5月田植え、7月草

取り、10月稲刈りの農作業を体験、マイ田圃で収穫されたヒノヒカリすべてを持ち帰ることができるというもの。初年度14名、17口のオーナーが応募、作業日にはオーナーの家族、友人、同僚など40名前後の来訪者があり、静かな集落に賑わいをもたらしている。保存会には会費として35万円が振り込まれるので、耕耘機を持参して田づくりの作業を行った人には5000円、オーナーの指導を行った人には2000円の日当を支払うことになっているという。

これまで橋原街道の近くにありながら、山間の忘れられたような集落貝の川は、七人の侍たちが仕掛けたイベントにより、今や町内一の注目される集落になった。集落には活気が生まれ、小規模高齢者集落といった雰囲気は全く感じられない。ことに、七人の侍は意気軒昂、百姓の技を持つ頼りになる存在である。黒澤明の「七人の侍」は野盗集団から集落を守ったが、貝の川の七人の侍は高齢者が放棄した棚田の守り人である。

## 貝の川地区の棚田へのアクセス



【公共交通】JR土讃線「須崎」下車、高知高陵交通バス「梶原」または「杉の川」行きで津野町役場下車すぐ

【自動車】高知自動車道須崎中央ICより国道197号線に入り約30分



## 棚田一杯の集落に滞在して 思うこと

新潟県長岡市小国町法末 田中 赳夫

まず、棚田には集落の想いが映っていると言えると思う。それは先祖代々受け継がれてきている中山間地に位置する田圃の維持、地域の環境保全、また減農薬などを目指して難儀をしながら稲作を継続していることが見えてきます。

棚田を維持するにはその上部に「水源」が確保されていることが必須であり、水源が枯渇するとその時点で放棄されることになる(地震などで水系が変わって涸れてしまう場合等)。

一つの棚田群は複数の農家の田圃で構成されているのが一般的である。水は棚田の上部の水源から順次下の田圃へ(言わずもがなですが)管理して流されていく。棚田群を構成している農家の方々は親戚縁者等よりも密な関係を必要としているようだ。棚田群の田圃はあたかも自分の田圃であるかのような連携した維持管理が適宜行われないと、その田圃群全てに悪影響を与えるからである。

それぞれの田圃での「お米の出来・不出来」ではなく共有物と考えられる「水」、また施肥などに関しても情報の共有が必須のようである。なぜならば一つの田圃での出来事が水を介して他の田圃に影響を及ぼすからである。

棚田の保全が叫ばれている昨今ですが、之は単に中山間地に存在する田圃そのものを維持継続するというよりも、むしろその地域・集落の過去から受け継がれてきている地域の文化



稲刈り後の水を張った田圃越しに見た越後三山

(集落の民が中心にいる)を継承することが大切であると言っているのであろうと思う。棚田では田植えから稲刈りまでの間、施肥、除草・草刈り・水管理等をお百姓さんが四六時中天気状況と相談しながら少しずつ地域の自然相手に行っているのです。このような地道な農作業と呼ばれている活動があって初めて秋の収穫に続いていくのです。

集落の天気は地元シニアのそれの方がよく当たると言われているがそれを実感する。

棚田に立つと(街中よりも)吹いてくる風の涼しさを感じる。それは人為的な熱源から離れていること、また周りが木々に囲まれており、それらを通して山の上から吹いてくるからと思う。(標高が100メートル異なると摂氏約0.6度の気温の変化があるといわれている)

今は棚田の周りの山の木々は紅葉が盛りで、稲刈り後にしか見られない光景が展開されている。

このような中山間地の棚田を(時期を問わず)訪問いただくと、地元の農家の方々の歓迎を受けることでしょう。

## 会員レポート

シンポジウム「中山間地の水利について考える  
～山腹水路や溜池をどう保全するか～」参加報告

東京都三鷹市 岩野 知子

シンポジウムでは、水谷先生から田んぼの3つの価値(経済・環境・文化)とユネスコの世界文化遺産にも登録されたバリ島の水利組合スパックのお話、千賀先生からは中山間地域を支える組織や取り組み事例と童謡「春の小川」が用水路と田んぼを描いたものではないかというお話をうかがい、参加者それぞれが田んぼと水を潤す水と人の関わりに思いを馳せているような会場の雰囲気を感じました。壇さらいボランティア3年目の私はパネルディスカッションで、作業や懇親会で地元の方々と時間を共有し、東京に帰った後もブログなどを通じて暮らしたの豊かさや厳しさを知ることにより身近に感じており、まるで新しい親戚ができたような感覚だと話しました。

2日目の堰の見学会では、地元の関係者とともに、地域で同じように堰と集落の維持に苦心している方、農業土木が専門の方、地域づくりに関わる方と一緒に歩き話しました。異なった切り口からの「堰の価値をどう繋いでいくか」というやり取りは、いちボランティアとしての関わり方を新たな視点で捉えなおすよい機会になりました。

2012年12月11・12日  
福島県喜多方市山都町

※「堰と里山を守る会の活動内容については6ページの『棚田・里山だより』を参照してください。



会員のひろば



会員の声募集!

「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください! (ご要望、感想やご質問でもOK!) (会員の声800字まで、会員レポート400字まで。写真も添えて) 〒160-0003 東京都新宿区西新宿七-1-166 トーシンハイム七〇四号「棚田に吹く風 会員のひろば」宛 メールでも受け付けています ↓ hiroba@tanada.or.jp

# 棚田散歩

上：佐賀県玄海町浜野浦  
下左：新潟県柏崎市高柳町の荻ノ島集落  
下右：土谷棚田の夕暮れ



私は自然や里山風景が好きで、山登りや里山散歩によく出かけています。特に好きなのは長崎県の土谷棚田です。たまたまインターネットで写真を見てその美しさに魅せられ、23年は一人旅、24年は火祭りを姉と見に行ってきました。土谷棚田は一つ一つの棚田曲線が何とも言えない連帯感を出し、背景の海とのコントラストがとても美しいと思います。

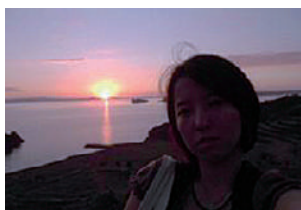
最近では自分で撮った、色々な棚田の写真を部屋に飾って楽しんでいます。私にとっては、あの世界的に有名なねずみのキャラクターよりも、棚田がとても気になります。

24年の秋は土谷棚田以外にも、大浦、浜野浦、江里山の棚田を見に行ってきました。浜野浦は恋人の聖地に認定されていたのを知らずに一人旅で行き、カップルに写真を撮ってもらっちゃいました。

今後の目標は雪化粧した棚田を見に行くことです。

私の大好きな棚田風景は、守っている方々の大変な労力があつてのものだというのを忘れてはいけません。棚田ネットワークを通じて、何かお手伝いが出来たらと思います。

(東京都練馬区 内海 真実)



## 編集部イチオシ! BOOK & MOVIE



©「故郷の香り」製作委員会

2003年／中国／カラー／DVD／109分  
配給：東京テアトル／ブロードメディア・スタジオ  
監督：霍建起／原作：莫言

舞台は見渡す限りの棚田に囲まれた中国の農村地域。

農村を出て北京で役人として働く男は、10年ぶりの短い帰郷の折、初恋の女性の変わり果てた姿を見かける…。甦る若き日の思い出、そして後悔の念。10年という月日のもたらす大きな環境と心の変化を、雄大な中国の大自然の中に丁寧に描き出している。尚、この映画は2003年度東京国際映画祭にて最優秀作品賞を受賞。また聾啞のキーマンを演じた日本の俳優香川照之は同祭にて最優秀男優賞を受賞している。

### ふるさと 故郷の香り



中国山地山間棚田の民俗  
神田三亀男 著  
¥2000  
広島地域文化研究所  
2012年9月

### 中国山地山間棚田の民俗

卒寿を迎えた著者の、中国地方の棚田に関する論考と、集落を訪ねてお年寄りから丹念に聞き取った民俗事例がまとめられている。取材時には平成12年、14年などというものも多く、この地域は、この人々は今はどうなっているだろうと考えると、胸のふさがる思いがする。

取材はほとんどが広島県内。隣接する地域もあり、地図が添えられていれば更に興味深いものになっただろう。



# 日本最大級の環境展示会 エコプロダクツ2012

## 出展レポート

### 棚田保全団体共同出展企画

- NPO 法人恵那市坂折棚田保存会（岐阜県恵那市）
- NPO 法人大山千枚田保存会（千葉県鴨川市）
- 奥能登棚田ネットワーク協議会（石川県珠洲市）
- 榎平棚田保全活動推進委員会（山形県朝日町）
- NPO 法人十日町市地域おこし実行委員会（新潟県十日町市）
- 石部地区棚田保全推進委員会（静岡県松崎町）

### テーマ「棚田から考える、食と農」

エコプロダクツ展へは、主催者の企画に協力して、あるいはNPOとして単独で、何度か出展してきましたが、保存会の皆さんを誘って共同出展というのは初めて。こういう巨大な展示会の中に棚田のコーナーができることと果たしてどうなるのか、保存会の皆さんはもちろんのこと、私たち自身にもわからず、夏ごろから、エコプロ展の主催者である日経新聞の担当者とも相談しながら準備してきました。失敗も成功もありましたが、やってよかったと思います。次はきつと、もっとうまくやれることでしょう。



## 栃木県茂木町

### 茂木プロジェクト

#### 岩ノ作棚田の新年



稲の穫り入れが終わった田んぼの周りで落ち葉を舞わせていた木々もすっかり葉を落とし、身が引き締まるような冷気の中で、岩の作棚田は新たな年を迎えようとしています。

棚田ネットワークは、2013年から新宿区立環境学習情報センターが主催する「新宿の環境学習応援団」に参加し、茂木プロジェクトがこの活動を担当することになりました。来る2月2日（土）、新宿区立戸山小学校で開催の“まちの先生見本市”で私たちの活動の一端を展示紹介します。このような活動で「子ども棚田ファン」を増やし、茂木プロジェクトの活性化につなげるべく、いろいろ作戦を練っているところです。会員の皆さま、ぜひ覗きにきてください。

(安井 一臣)

## 岐阜県恵那市

### 棚田ビオトープ プロジェクト

#### 「第6回かえるの卵を探そう！」参加者募集



刈り残しの稲を刈る

まだ稲が青かったので刈り残しておいた上段の棚田ビオトープの稲を、10月13日（土）に刈りました。ほんとうに小さい田んぼなのですぐに刈り取れました。これでひと段落ですが、冬には2～3年毎におこなっている畦畔草地の火入れをする予定です。

棚田ビオトープを中心に坂折棚田全域で棚田を代表する生物のひとつであり、初春の水溜りに卵を産むヤマアカガエルを卵を探す「かえるの卵を探そう！」も早いもので6回になります。2013年3月24日（日）10:00から開催、現在、参加者を募集しております。詳細は企画イベント案内をご覧ください。

(相田 明)

## 静岡県松崎町

### 昔ながらの米づくりプロジェクト

#### 新米を食べる会



保存会会長のお話を熱心に聞く参加者



お土産用にパッケージした新米

10月16日にスタッフ二人と保存会の方とで脱穀してできたお米はなんと150kg! 粒も大きく素晴らしい出来でした。その新米を味わうべく11月11日にプロジェクト初年度の最後を締めくくる「新米を食べる会」を石部

棚田の交流棟で開催しました。地元物産のきびなごやしいたけ、さつま揚げなどを炭火で焼きながら、味わう新米は格別でした。そして、保存会会長の高橋周蔵さんに復田当初のお話、石部の現状、そしてこれからの夢を語っていただきました。来年も、より一層魅力あるプロジェクトにしていきたいと思いますので、皆様よろしく願います!

(高桑 智雄)



# 使いづらい、だけど美しい! 始めてみよう『旧暦生活』

明治5年まで日本で使われていた旧暦は、月の満ち欠けを1ヶ月のサイクルとした太陰太陽暦。『棚田ごよみ』は、来年一月一日が、新暦2月10日からはじまる本当の旧暦カレンダーです。

きれい!  
楽しい!と  
皆さんから  
大好評!

「棚田ごよみ」で、  
より自然を意識した、  
季節感のある暮らしを  
取り戻してみませんか?

平成25年版  
『旧暦棚田ごよみ』  
写真:青柳健二

¥1,000 (税込)  
贈答用 5部セットがお得!  
¥4,500 (税込)



サイズ:A4(開くとタテA3サイズ⇒)

※二十四節気、七十二気候、雑節を表記  
※月の満ち欠けイラストが入っています  
※新暦の日付も小さく書いてあります



絶賛!  
販売中

ご購入は  
こちら⇒

棚田ネットワークグッズ販売サイト <http://www.tanada.or.jp/tanadanetwork/goods/>  
棚田ネットワーク事務局 Tel/Fax.03-5386-4001



## わたしたちと『棚田の応援団』やりませんか!

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。消えゆく美しい「棚田」をどのように保全していくことができるのでしょうか?一緒に考えませんか?ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう!

会員に  
なると!

会報誌「棚田に吹く風」(年6回)やイベント案内お届けの他、棚田ネットワークが主催する各プロジェクト(イベント)への参加や、スタッフとしての活動もできます。

年会費

○個人会員

維持会員 1口1万円(1口以上)  
一般会員 3,000円  
学生会員 2,000円

## 法人会員を募集しています!

私たちの活動にご支援・ご協力をいただける、企業、団体、事業主さまを募集しています。詳細はお問い合わせください。

年会費

○法人会員

1口3万円(1口以上)

この上のスペース(ページ上1/2サイズ)は法人会員さまのPRスペースとして広告や広報にご利用いただけます。(詳細はお問い合わせください)

編集部から  
「旧暦棚田ごよみ」がついに発売されました。会の財政を何とかしたいと数名のメンバーが立ち上がり、売れるカレンダーを作ろうと始めたプロジェクトです。青柳健二さんという素晴らしい写真家の協力、当会きつてのデザイナーのレイアウト、営業戦略を練る若手スタッフ、そして旧暦という時代のニーズを取り込んだプロジェクト・リーダー。見事なチームワークで出来た逸品です。実際ホントに売れるのかという心配もありましたが、現在順調な滑り出しで、予約の時点で制作費はまかなえる段階にきています。でも会の財政引いては棚田保全に貢献するにはこれからの勝負です。みなさん、ぜひ周りの方に紹介してください!



2013年1月号 Vol.86

発行 NPO法人  
棚田ネットワーク

〒160-0023  
東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号  
Tel / Fax 03-5386-4001  
e-mail: info@tanada.or.jp URL: www.tanada.or.jp  
郵便振替口座: 00100-7-151565

## ホームページのぞきを見て!

会報「棚田に吹く風」の紹介ページ  
バックナンバー情報や  
見本誌請求もできます!



<http://www.tanada.or.jp/tanadanetwork/backnumber/>